東アジアにおけるヴォーリス (W.M. Vories) の建築活動に関する研究

- その2 中国関連の現存設計図面の整理・分析を中心に -

A STUDY ON THE ARCHITECTURAL WORKS OF W.M. VORIES IN EAST ASIA

- Part 2 Focused on the archives of his drawings in China -

鄭 昶 源*, 山形政昭**

Changwon CHUNG and Masaaki YAMAGATA

William M. Vories, born in the USA, 1880, came to Japan in 1905. He, as a missionary architect, had performed architectural works not only in Japan, but also in East Asian countries.

This study aims to clarify his architectural works focused his drawing archives of the architecture in China. Through surveying of those archives, we could find out his brainstorming sketches. Furthermore those sketches showed what kind of notions he had initially on plan proposals clearly, also blue prints showed the proof of cooperation with other architectural offices in this province. Through the analysis of the archives, it was made clear that the description in drawings had written in English first and then added translation of Japanese. We could read that these drawing show Japanese styled room positively from the 1930s. The reason was thought that his works at that time would have developed for Japanese Christian companies in Manchuria.

Keywords : W. M. Vories, protestant mission, missionary architecture, Chinese modern, East Asia

ヴォーリス、キリスト教、ミッション建築、中国近代、東アジア

1. はじめに

本研究は、1905 年に来日し、宣教活動の傍ら、東アジアを舞台に広く建築活動を行ったウィリアム・メレル・ヴォーリス (1880~1964 年) に関する継続研究である。特に本稿では、前稿の「研究、その 1」¹⁾ で取り上げた韓国での活動究明に引き続き、日本国外における彼のもう一つの活動舞台であった中国を対象とする。

ヴォーリスは来日の翌年 (1906 年)、休養のためにアメリカへ 4 ヶ月間帰国したことがある。彼はその移動中の出来事として「船客の中には中国から帰米の途上にある宣教師が何人かいたが、その人々とはその後も、多年にわたって通信を続け、そのうちのある者とは、お互いの伝道地を訪問し合って親交を深めた。こうして近江兄弟社の国際的な接触は、早くもはじまった。」と述べており²⁾、東アジアを舞台に広く活動したいという強い意志が来日当初からあったことが窺える。結果的に、ヴォーリスは韓国 (朝鮮半島) での 146 件をはじめ、中国 37 件、台湾 8 件という設計活動の成果を残した。そのうち、彼にとっての中国とは、日本国外進出の出発点として位置づけることができる。なぜならば、日本での建築活動の開始直後である 1911 年に「Tokyo Chinese YMCA」を既に手がけており、その翌年には最初の海外出張として中国を訪れているのである。

しかしながら、ヴォーリスの中国での建築活動に関しては、その建築リストの全貌³⁾ と 2 回目の中国出張 (1914 年) を中心とした既往研究⁴⁾ があるものの、未だに不明な部分が多い。特に、計画案の実現有無すらほとんど不明な状況である。そこで、現存する当時の設計図面は、実現された建築物を調査する上でもっとも貴重な一次

史料であり、現存する図面の整理調査が先決といえよう。本稿ではその図面史料の整理調査と分析過程を通じて、各図面から読み取れた特徴を中心にまとめることとする。

2. 中国関連の設計図面の整理調査およびデータ構築

ヴォーリスの中国関連の図面史料は、現存する全てが大阪芸術大学に所蔵されており、「研究、その 1」と同様に整理調査とデータ構築、そして史料のデジタル化作業を行った。これらの整理調査の結果、中国関連の図面は、全 24 件の設計作品に対して 362 枚が所蔵されていることが明らかになり、表 1 としてまとめることができた。

これらの現存する図面は、「Tokyo Chinese YMCA」などの日本に建つ中国関連の設計図面を含め、1912 年に訪れた初の中国出張の成果としての一連の設計図面から 1940 年に作成された「(株) 又一商店天津支店」まで、主な作品が残っている。

しかし、1914 年の 2 回目の中国訪問で依頼された「Lily Valley YMCA (枯嶺)」は、訪問中にその設計にしばらく時間を使ったという記録⁵⁾ があるものの、現存図面が見当たらず、その他ヴォーリスの建築リストに載っている 12 件の作品は、設計図面の所在が不明である。

一方、図面が現存する作品においても「大連双葉学院」のように多数の原寸詳細図を含む全 61 枚の実施図面が所蔵されている例があれば、「Soochow Residence」のように平面図 2 枚のみしか現存しない例もある。また、「Hankow YMCA」や「National Headquarters of the YMCA in Shanghai」は、初期スケッチ図面など実施図面の手前のもののみが保管されており、図面の保存状態においても作品ごと

* 日本学術振興会 外国人特別研究員・博士 (工学)

** 大阪芸術大学 教授・博士 (工学)

Postdoctoral Fellow of the Japan Society for the Promotion of Science, Ph. D.
Prof., Osaka University of Art, Ph. D.

表1. 中国関連の現存図面リスト

#	Job No. (Sk No.)	Title	Date	Contents																			備考	
				Plan					Elevation					Section					その他					
				Sheets	Scale	Drafter	Preparation	Size (cm)	Sheets	Scale	Drafter	Preparation	Size (cm)	Sheets	Scale	Drafter	Preparation	Size (cm)	Contents (Sheets)	Scale	Drafter	Preparation		Size (cm)
1	4305	Tokyo Chinese YMCA	1911.6 ~1912.5	5	1/50	KM	Ink	78*54	2	1/100, 1/50	LGC, S.O	Ink	78*54					詳細図(8)	1/20, 1/10, 1/2	LGC, S.O, KM	Pencil, Ink	45*29, 27*21	地震被害改修	
			1921.1	3	1/100		Ink	78*54																
2	4102	Proposed Additio to Tooker Memorial Hospital, Soochow, China	1912.6 ~7.	2	1/4"=1'	KM	Ink	50*38	2	1/50	HS	Ink	50*31, 38*34					配置図(3)				Ink	51*38	増築部分
				1914.11					1	1/8"=1'		Ink	76*51	1			Ink	51*27						
			?	4	1/8"=1'		Ink	76*51, 53*21, 44*35						1	1/8"=1'		Ink	76*51	配置図(2)	1/8"=1'		Ink	76*51	
3	8520	Stucco Res.	1912.5 ~10	1	1/50	S.K	Ink	76*50	2	1/50	HS	Ink	50*38											
4	8521	Soochow Res.	1912.5	2	1/4"=1'	HS	Ink	48*48																
5	1802	Presbyterian College, Hangchow	1912.8 ~11.						2	1/4"=1'	HS, LGC	Ink	77*51, 47*34											
			1913.8						3	1/4"=1'	HS	Ink	74*51, 50*47					詳細図(1)	1/4"=1'	KE	Ink	51*38		
			1914.3	3.5	1/4"=1'	LG, C	Ink, Pencil	92*48, 74*51						0.5			Ink	74*51						
			1915.6											1	1/4"=1'		Ink	77*51						
			1916.3 ~12						2	1/4"=1'		Ink	77*51, 50*47					詳細図(5)	5=1, 3/4"=1', 3/2"=1', FS		Ink	77*51, 51*38		
			1917.6															詳細図(1)			Ink	77*51		
			1919.5															詳細図(1)	1=10 FS		Pencil	53*39		
			?	1	1/4"=1'		Ink	71*48										配置図(1), 詳細図(1)	1/2"=1'		Pencil	100*50, 1.		
6	Sk.No. 4322	Hekow YMCA	1914.1														敷地情報図(1)			青焼き	48*41	他事務所作成		
			?	5	1"=20feet		Pencil	55*40	2			Pencil	55*40					スケッチ(平面13)			Pencil		45*29, 27*21	
7	4321(?)	National Headquarters of the YMCA in Shanghai	?	3	1/8"=1'		Ink	72*52, 70*50										配置 図 (1) Schetch(平面(15),立面(1))			Ink	57*52		
8	7206	Chinese Student' Hostel, Tokyo	1914.7	4	1/50	KM	Ink	76*51, 66*51	5	1/50	KM, MI	Ink	76*51, 54*51					詳細図(3), Sketch(1)	1/10, F.S	KM	Ink	76*51, 51*38		
9	1252(Sk.A-146)	Congregational Church Moukden	1919.7 ~9.	3	1/50		Ink	76*51	4	1/50		Ink	76*51	1	1/50, 1/20		Ink	76*51	詳細図(3)	1/50, 1/20, 1/10		Pencil	77*55, 76*51	
			1919.3	1	1/50	EK	Pencil	76*51	1	1/50		Pencil	55*40										日曜学校会館	
10	3302	Myung Sin School, Lungchingsun, North China	1932.2 ~3.	3	1/100	IN	Pencil	78*54	2	1/100	IN	Pencil	78*54	1	1/100	IN	Pencil	78*54	構造図(2)	1/50, 1/20		Pencil	77*53	他事務所の作図による青焼き図面(7枚)
11	5265	大信洋行工場・事務所, 天津	1934.3	0.8	1/100	RK	Pencil	80*55	0.6	1/100	RK	Pencil	80*55	0.4	1/100, 1/20	RK	Pencil	80*55	仕様書(0.2)					
12	?	満洲メンソーラム株式会社	?	0.4	1/100		Pencil	78*53	0.4	1/100		Pencil	78*53	0.2	1/100		Pencil	78*53	配置図(0.5), 増築計画-宿舎(3)	1/500, 1/100		Pencil, 青焼き	77*53	増築計画
			1939.10	0.5	1/100		Pencil	77*53									増築敷地図(1)	1/200		Pencil	77*53			
13	1318	大連市双葉学院	1937.4 ~7.	3.5	1/100	K.S.S	Pencil	77*52	2.5	1/100	K	Pencil	77*52	2	1/100, 1/20	K.S.S	Pencil	77*52	詳細図(50), 構造図(3)	1/100, 1/50, 1/20	S.S, K.T, K.I.M, T.K	Pencil	77*52	
14	Sk.775	Dormitory Building for Taisinyoko, Tairen	1938.12	2	1/100	K.Ta	Pencil	78*53										スケッチ(立面2)			Pencil	40*27		
15	9124	奉天鉄西・満洲アルミニウム食器株式会社工場	1939.1 ~2	1	1/100	K.TA	Pencil	77*53	0.5	1/100	K.TA	Pencil	77*53	0.5	1/100	K.TA	Pencil	77*53	詳細図(2), 配置図(1), 構造図(4), 仕様書(1)	1/100, 1/50, 1/20, 1/300	K.TA, K.S	Pencil	77*53	#7269A8B (宿舍・食堂) #5257(事務室)
			1939.1 ~3.	1	1/100	RK	Pencil	77*53	1.5	1/100	RK	Pencil	77*53	0.5	1/100	RK	Pencil	77*53	詳細図(0.5)	1/20	MS	Pencil	77*53	
			1939.1 ~3.	1	1/100	RK	Pencil	77*53	1	1/100	RK	Pencil	77*53					詳細図(0.5)	1/20	MS	Pencil	77*53		
16	5254	満洲大信洋行支店, 奉天	1939.2	2	1/100, 1/50	MS	Pencil	78*54	1	1/100	MS	Pencil	78*54	0.5	1/100	MS	Pencil	78*54	詳細図(5.5), 構造図(8), 仕様書(1)	1/20, 1/10, F.S	MS, Y.O, K.Ta	Pencil	78*54	
17	9125	大信洋行天津工場	1939.3	2	1/200, 1/100	EK	Pencil	80*55	1.5	1/100	EK, RK	Pencil	80*55	1	1/20	EK	Pencil	80*55	詳細図(4), 配置図(1), 仕様書(0.5)	1/100, 1/20	EK	Pencil	80*55	
18	5256	大信洋行ハルビン支店	1939.3 ~7.	2	1/100	S.Ku	Pencil	78*52	1.5	1/100	S.Ku	Pencil	78*52	0.5	1/100	S.Ku	Pencil	78*52	詳細図(1)	1/20	S.K	Pencil	78*52	
19	5260	天津・大信洋行支店	1939.4	1	1/100	EK	Pencil	78*53	0.5	1/100	MS	Pencil	78*53	0.5	1/20	MS	Pencil	78*53	詳細図(3), 構造図(1), 配置図(0.5), 仕様書(1.5)	1/100, 1/50, 1/20, F.S	MS, RK, EK	Pencil	78*53	
20	5261	大信洋行錦慧支店	1939.4	2	1/100	EK	Pencil	76*53	1.5	1/100	EK	Pencil	76*53	1	1/50, F.S	EK, RK	Pencil	76*53	詳細図(2), 構造図(2), 配置図(0.5)	1/100, 1/20, 1/2, F.S	EK, RK, MS	Pencil	76*53	
			?	4	1/100		Pencil	76*53	1	1/100	S.K	Pencil	76*53					詳細図(1), 仕様書(1), 敷地図(1)			S.K	Pencil	76*53, 76*28	
21	Sk.145	日本組合新基督教教会堂及び牧師館	1939.5	1	1/50	EK	Pencil	78*53	1	1/50	EK	Pencil	78*53	2	1/50, 1/20	EK	Pencil	78*53						
22	5270	株式会社又一商店天津支店	1939.12 ~40.2	3	1/100	MM	Pencil	77*53	1	1/100		Pencil	77*53					詳細図(1.5)						
			1940.3 ~4.	3	1/100	MM	Pencil	77*53	1	1/100	MM?	Pencil	77*53	0.5	1/100		Pencil	77*53	詳細図(2.1)	1/50, 1/20, F.S		Pencil	77*53	
			2600.5	1	1/100	MM	Pencil	77*53	1	1/100	MM	Pencil	77*53	1	1/100	MM	Pencil	77*53						
23	5269	又一株式会社濟南支店	1939.12	1.5	1/200, 1/100	MM?	Pencil	78*53										配置図(2.5)	1/200, 1/100	MM?	Pencil	78*53		
24	8909	大信洋行月見ヶ丘小住宅	1940.3	1	1/100	K.S, EK	Pencil	55*39	1.5	1/100	K.S, EK	Pencil	55*39	1.5	1/100	K.S, EK	Pencil	55*39	スケッチ(平面6), 詳細図(3), 仕様書(2)		EK	Pencil	55*39, 48*40, 29*22	

(表1の作成方法)

①配列順序：中国関連の図面に関しては、建築種目を問わず、時代順に列挙する。

②図面分類：大きく平面図、立面図、断面図、その他に分けた。しかし、設計図面においては、平面及び立面、立面及び断面などが一枚にまとめて表現されてものもあり、その場合の図面枚数 (Sheets) の単位表現に「0.5」などの小数点を使った。

にばらつきがあることが分かる。

このような保存状態の差異に関する事由は不明であるが、最終図面が現存しないものが必ずしも計画倒れになったとは断定できない。一例として「National Headquarters of the YMCA in Shanghai」の平面スケッチ図面と竣工写真を比較してみた結果、おおよそ初期スケッチ案が活かされていると推察できるからである。このような点においても現存する図面は、今後行う現地調査で欠かせない一次史料である。また、僅かながら現存する初期スケッチ図面は、ヴォーリズが自ら作図したものに違いなく、彼の設計プロットを究明する上で重要な史料といえよう。

図1.「National Headquarters of the YMCA in Shanghai」
(左:1階平面図、右:竣工写真⁶⁾)

3. 中国関連の設計図面の分析・考察

ヴォーリズの中国関連の現存図面を作成年代順に見てみると(表1)、作品題名の表記に大きな変化があることに気付く。1932年の「Myung Shin School」まではもっぱら英語で書かれているのに対して、1934年の「大信洋行工場・事務所、奉天」から最後までは1件を除く全てが日本語になっていることが一目瞭然である。このようなことは韓国図面の分析の際には見受けられず⁷⁾、中国における図面に現れた大きな特徴ともいえる。では、何故このようなことが起こったのであろうか。結論から先に述べると、中国におけるヴォーリズの建築活動は、下記の表2のように性格が異なる二つの流れがあったことが指摘できる。そこで、中国関連の図面においては、この二つの流れを注視しつつ、活動の全般的な流れに沿って図面分析を進めることにする。

表2. ヴォーリズの中国関連の建築活動における二つの流れ

活動時期	活動舞台	建築種目
1910年代	上海、杭州、蘇州などの中国南部	ミッション関連の建築
1930年代	大連、奉天(瀋陽)、新京(長春)などの旧満州地域(中国東北部) ⁸⁾	日系企業関連の建築

3-1. ヴォーリズ建築の出发点としてのYMCA建築

ヴォーリズは1910年から本格的に建築に携わることになるが、翌年の1911年には既に中国関連の設計を手がけている。ただし、それは中国本土ではなく、東京の地に建つ「Tokyo Chinese YMCA」であった。ここで、韓国関連の最初の仕事も「Tokyo Korean YMCA (1912年)」であったことと考え合わせる必要がある。それはまた、ヴォーリズが八幡商業学校の英語教師として来日した直後、「八幡YMCA」に発展するバイブルクラスを設けて伝道活動を行ったこと、そして1906年には「八幡YMCA」を自ら設計する傍ら、教師解職事件の以降には、デ・ランデ設計の「京都YMCA」の現場監督として本格的な建築活動を開始したこともと繋がるものである。後にミッション関係の建築を主に手がけたヴォーリズであるが、その出发点は日本国

内外を問わず彼の伝道方針と軌を一にしたYMCA建築にあったといえよう。

さて、「Tokyo Chinese YMCA」の平面図からは、玉突き室や読書室などのパブリック空間と中央のジムナジウム、そして学生寮としてのプライベート空間を巧みに切り分けるなど、学生YMCA運動を指導した経験者ならではの工夫や提案が読み取れる。また、実際に設計依頼者であった世界YMCA同盟のG.M.フィシャーは、「この建物は、使う上で最高であり、コンパクトで、なおかつ最も巧みなプランニングで構成されている。設計者のヴォーリズをはじめ、協力者全員に感謝を申し上げたい。」⁹⁾と述べるほどであり、引き続き「Chinese Student' Hostel, Tokyo (1914年)」、2代目の「Tokyo Chinese YMCA

(1934年)」の設計依頼へと繋がる形となったのであろう。さらに、この時期に彼が受けた評価は、中国本土に建つYMCA設計にまで仕事が拡大するきっかけとなる。

1914年5月、ヴォーリズは中国訪問を行う。2回目当たるその訪問については、

自叙伝に「世界YMCA同盟の依頼で、中国におけるYMCAの建物の設計を手伝うためであった」¹⁰⁾と訪問目的が述べられている。また、訪問地や建築活動に関する詳細記録も載っており、以下の表3のようにまとめることができる。

図2.「Tokyo Chinese YMCA (1911年)」
(上:2階平面図、中:1階平面図、下:立面図)

表3. 1914年の中国訪問での主な活動

日付	訪問地および活動内容
5月2日	上海に到着、上海のYMCA少年部の建物を設計
5月7日	南京のナショナルYMCA会館の予定地を視察
不明	漢口へ移動途中、宣教師の避暑地がある枯嶺に降り、リリー・バレーに建つYMCA修養会館を設計
5月12日	漢口YMCAの敷地を視察
不明	蘇州の宣教師から建築上の相談があるとのことで、日本への帰国延期を決定
5月18日	杭州YMCA会館の敷地を視察
5月21日	蘇州の病院計画に関する会議に参加
5月23日	出航までの時間を枯嶺のYMCAの設計に使う

以上の記録より、主にYMCA建築を中心に建設予定地の視察と設計活動を行ったことが判明できるが、現存する図面は「Hankow YMCA (漢口)」と「National Headquarters of the YMCA in Shanghai (上海)」の2件のみである。しかもこれらは実施図面でもなく、特に「Hankow YMCA」の場合は、初期段階のスケッチ図面しか現存しない。

そこで、上記した自叙伝の「設計を手伝うため」という表現に再注目すると、純粋な意味での「手伝う」、つまり幾つかの建築物に関しては事務所がある近江八幡まで持ち込まず、現地においてスケッチ図面を作成し提案するのみで終わった可能性も排除はできない。しかし、例えコンセプト設計の提案で終わったにしろ、ヴォーリズが持つ理想案は伝わったわけであり、その意味でも現存する「Hankow YMCA」のスケッチ図面は、彼の設計提案の原点が窺えるものといえ

る。

特に、「Hankow YMCA」のスケッチ図面からは、吹き抜け空間を持つ1～2階のパブリックスペースと寝室がコンパクトに配置された3～4階の寄宿舎、そして5階に屋上庭園まで、ゆとりある空間を提案したことが見てとれる。さらに、将来の増築を想定しての工夫も

図3. 「Hankow YMCA」(上: 1階平面スケッチ、下: 立面スケッチ)

さて、ヴォーリズによって作成されたスケッチ図面は、建築事務所スタッフによって実施図面化されていくのだが、中国関連の設計図面からは、ドローイング担当者として全20名のスタッフのイニシャルを確認することができた。これは、図面製作過程が韓国関連の図面と同様、設計が行われた各々の時期に所属していたスタッフ全員の協力によって進められたことが窺える。

一方、韓国での図面では確認できなかったが、中国でのものは「Tokyo Chinese YMCA」や「Tooker Memorial hospital, Soochow」など、1914年までの図面から、L. G. チューピン (L. G. C) と村田幸一郎 (K. M) のイニシャルが確認できたことに注目したい。チューピンは初期のヴォーリズの建築活動において大きな支えとなった米国人建築家であり、村田は八幡商業学校の卒業生として近江兄弟社の三創立者の一人である。特に村田は、正式な建築教育を受けたことがなく、彼が担当した図面も決して見事な作図とは言いがたい。しかし、初期の図面に彼らのイニシャルが確認できたことは、「神の国」¹¹⁾ という理想を求め、少数の同伴者が集まったばかりの事務所の様子が窺える一面として意義があるだろう。

3-2. 中国への初訪問と不思議な設計プロセス

ヴォーリズの中国への最初の訪問は、前述したYMCA側からの招待(1914年)より早い1912年5月に行われた。時期的には中国関連の処女作である「Tokyo Chinese YMCA」が竣工する前であるが、いよいよ中国本土からの設計依頼が舞い込んできたのである。その中国初訪問については、「5月に中国旅行の特権が与えられた。その旅行の目的はビジネスであり、そもそも一つの設計依頼に応じた訪問であったが、2週間の滞在中に五つの仕事にまで拡大した。」¹²⁾ との記録もあり、また上海、杭州、蘇州が主な訪問地であったことが分かる。

この五つの建築仕事については、「Soochow Chapel」を除く4件の図面(表1の#2～5参考)が現存されており、設計内容の詳細が確認できる。そのうち、特筆すべきものとして「Presbyterian College, Hangchow (杭州)」の図面から見てとれるある種の特異さが指摘できる。それは、校舎建築ではなく校内チャペル計画であったことが判明したことはさることながら、それよりも不思議と思われるのが図

あり、増築によってファサードが最終的にシンメトリーになることや、吹き抜け空間をつなぐアーチ状の大窓をはじめ、室の用途別により窓の意匠を変化させるなど、シンメトリーでありながらも豊かな表情演出を試みたことが窺える。

面作成の日付である。訪問直後の1912年8月に作図された立面図から1919年の詳細図まで、図面作成期間が実に長く、他のヴォーリズの図面からはここまで長期間を要した設計プロセスの例を確認することができない。それも表1の#5からも分かるように、1912年から1919年までの間、ほぼ毎年作図が行われたのは異例のことであろう。

図4. 「Presbyterian College, Hangchow」(左上: 1912年8月の側面図、右上: 1913年8月の正面図、左下: 14年5月の正面図)

設計プロセスの詳細をみると、立面図からは図4のように3段階にわたって計画案が修正されたことが分かる。しかもゴシックを基調とする主なイメージには変りがなく、規模が縮小されたという状況から、建築資金などの問題が起因したと考えられる。また、建築物自体の竣工写真からは1914年の立面案通りに実現されたことが分かるが、その以降1919年まで図面作成が続けられた理由は不明のままである。その理由とはともあれ、この事例からは、依頼者の要請に応じて最後まで根気よく対応していた様子が推察できるだろう。また同時に、設計案が実現するまで順調ではなかったことを物語っており、中国との様々な距離の問題もあったはずであり、対応が容易ではなかったことも想像できる。

以上の問題も起因したのであろうか、1919年に手がけた「Congregational Church, Moukden (奉天)」を最後にヴォーリズの中国での建築活動はしばらく途絶えてしまう。

3-3. 他建築事務所との連携

1920年代の活動の空白期を経て、ヴォーリズの中国での建築活動が再開されたのは、「Myung Sin School, Lungchingsun, North China」からである。

ところで、この学校が建つLungchingsunは、あえてNorth Chinaと添書するほど、広く知られていない都市であるが、現在、延辺朝鮮族自治地区の竜井(間島)を示す。この学校名からは、韓国語のアルファベット表記であるような印象を受ける。事実、「Myung Sin School」は、韓国から移住した人のために開設された「明信女学校」であるのである。当時の間島地域には、朝鮮半島の東北地域を宣教管轄とするカナダ長老教派が1912年から進出し、様々な宣教活動を行った。その宣教活動の一環として幾つかのミッションスクールが設置されたが、その一つが当校なのである。

活動の空白期が長かった中国に比べると、ヴォーリズの韓国における建築活動は拡大一路にあったといえる。特に彼は、1932年1月、初めてカナダ長老教派が管轄する半島の東北地方まで出向くなど、積極的に活動領域を広げていた。そして、その訪問成果として同教派による咸興の「永生学校」や「永生女学校」など、幾つかの設計依頼を受けており¹³⁾、これらと同時期に計画された先述の「Myung

Sin School」も自然とヴォーリズに設計が回されたのであろう。

ここで、「設計が回された」という表現を使ったが、それには理由がある。ヴォーリズが1932年1月にカナダ長老教派の地域を訪問する少し前に、「Myung Sin School」の設計は既に進んでいたからである。その証として、現存図面の一部には、一目でヴォーリズ事務所の作図スタイルと異なることが分かる青焼き図面7枚が含まれており、そこには1931年11月の日付と「Wickson & Gregg Architects, Toronto」の設計者ロゴが刻まれている。さらに、ヴォーリズ事務所による作図に違いない最終図面（1932年2月）には、両者のロゴが併記されており、共同設計であったことを物語っている。

しかし、共同設計ではあってもヴォーリズが後に加わり、最終仕上げを行ったと捉えられる。そのためであろう、最終図面からは、青焼き図面の最初案がほぼそのまま活かされている。ただし、ファサードの左右に位置する屋根がフラット・ルーフであった当初案が満足できなかったようで、一度はそのまま作図したものの、そこに×印をつけ、新たに切妻屋根へと変更したことが分かる。また、屋根デザインの変更により、同時期に計画した切妻屋根の「永生学校」と同様のイメージで仕上げることとなったと、みられる。

図5. 「Myung Sin School, Lungchingsun」
(左: 2階平面と×印された立面図、
右: 新に作成された立面図)

その他、共同設計ではないが、他社との連携の事例として、前述の「Hankow YMCA」の図面に混じっている「Hemmings & Berkley Architects and Civil Engs, Hankow」のロゴが入った青焼き図面1枚が挙げられる。敷地情報が描かれているこの複写図面は、作成日付などを考慮すると、ヴォーリズの現地訪問がないことを前提に作成され送られた可能性が高いものと考えられる。この件については、既に述べたように中国 YMCA 側の招待によって現地視察が実現できたものの、敷地情報の図面提供さえあれば、現地訪問を行わず設計が可能であったことを示唆するものであろうか。これらの他事務所との共同設計および連携は、同じく海外とはいえ、韓国図面からは発見することができず、中国図面から発見できた特徴の一つともいえる。

3-4. 企業家としてのもう一つの活動

ヴォーリズは1930年代に入り、中国での建築活動を再開したと述べたが、彼の中国訪問は1928年から既に行われていた。また、1930年、1931年と中国訪問が続く。しかし、これらの訪問は、その目的が建築活動とは無縁なものであった。

これらに関する訪問レポート¹⁴⁾からは、いずれも満州地域が主な訪問地であり、ヴォーリズ合名会社の三創立者の一人として建築以外の事業を担当した吉田悦蔵が同行したこと、また韓国を経由しての訪問であったことが分かる。訪問内容の詳細に関しては、韓国では建築活動を行ったことが報告されているのに対し、中国では建

築に関する内容や西洋人宣教師と接触した内容が一切なく、彼が販売権を持っていた「家庭薬メンソレータム」の事業関係者との打ち合わせなどが主に報告されている。

ヴォーリズは1920年、ヴォーリズ合名会社から新たに近江セールズ株式会社(O.S.C.)を設立し、建築設計事務所の他に、建築材料、メンソレータム、雑貨の輸入販売活動を開始した。特に、メンソレータムは1928年に社内の包装部が可動し、さらに1931年からは製造工場も完成し、自社による製造から販売までの事業本格化を図る。¹⁵⁾ その大きな市場として満州地域を想定したようで、特に1931年の訪問は、中国でのメンソレータム取扱所の設置計画に関する調査旅行であったことが分かる。また、1934年の業務報告書には、近江

図6. 「満州メンソレータム株式会社(奉天)」

セールズの支店として東京、大阪、満州の3カ所が挙げられており¹⁶⁾、自社発注設計による「満州メンソレータム株式会社(奉天)」の図面も残されている。

一方、ヴォーリズは1932年、東京にてO.S.C.建築金物工場をも設立した。しかし、「1937年、金物工場を満州にあるクリスチアンの会社売却した。売却した理由は、位置的に八幡から遠くて最高の結果を出すには展望が不透明であったためである」¹⁷⁾という。その売却先であるクリスチアンの会社は、当時満州で活躍していた大信洋行であることが分かった。1939年に発行された大信洋行の社史からは、その時点の工場及び工事部の現況として、満州地域所在の諸工場に混じって「東京O.S.C.建築金物工場」が挙げられている。

ヴォーリズと大信洋行とは、その以前から繋がりを持っていたようであり、大信洋行の存在は、ヴォーリズが1930年代に満州地域を中心として建築活動を本格化する上で重要なキーワードである。

3-5. 満州地域を中心とする建築活動

ヴォーリズの中国における1930年代の建築活動は、作図年代が不明である「満州メンソレータム株式会社(奉天)」を除けば、1934年に手がけた「大信洋行の工場・事務所(天津)」を皮切りに、以前とは種の異なる活動をみせる。その活動の特徴は、大信洋行、又一商店、満州アルミニウム食器株式会社といった満州に進出した日系企業の関連施設の設計に集中したことである。特に、満州アルミニウム食器株式会社も大信洋行の子会社であるから、ヴォーリズが1930年代に行った建築活動は、その過半が大信洋行の支店や工場などの関連施設であったといえる。

大信洋行は、大阪出身の若き創業者石田栄蔵によって1908年ハルビンにて開業し、1910年から本店を大連に構え、日露戦争の軍需廃品や満州鉄道の廃棄品などを処理する会社として出発する。以降も様々な事業展開とともに、1930年代末に至っては支店出張所が21ヶ所に及ぶまで成長し、その主な設計をヴォーリズが手がけたのである。また、その商号に関しては、「大阪の大と舊主稲岡商店の屋號信濃屋の信を取り更に本店としては信仰に生くるをモットーと

したこと・・・今にして見れば大連の大にも通じて・・・」¹⁸⁾との

図7.「大信洋行の工場・事務所（天津）」

説明があり、創業者は強い信仰をもつクリスチャンであったことが分かる。そこで、ヴォーリズが手がけた多数の大信洋行関連施設は、たといミッション建築ではないとはいえ、そこにはクリスチャン同士の強い結びつきがあったに違いない。

一方、少数でありながらこの時期にヴォーリズが手がけたミッション建築としては「大連双葉学園」や「日本組合新京基督教会堂及牧師館」などがある。しかし、これらのミッション建築は、1910年代に依頼されたものとは異なり、そのすべてが満州に進出していた日系のミッション施設であった。つまり1930年代、大信洋行の設計に代表されるヴォーリズの中国での建築活動は、場所は中国といえども全てが日本関連の施設であったのである。そして、このことが本章の冒頭で述べたように図面題名などの表記が日本語で書かれた所以の一つとして考えられる。

さて、設計依頼者が日本人に変わったことで、図面表記のみならず、設計内容においても和室の登場という特徴が発見できる。しかも、1934年の「大信洋行の工場・事務所（天津）」はじめ、「満州メンソレータム株式会社（奉天）」など、ほとんどの作品の平面図に和室が計画されている。それは、これらの設計が主にオフィス建築でありながらも、各々の上層部に住居施設を含む職住複合建築であった。また、その住居空間は家族室や单身者室で構成された和室として提案されており、各事務所の日本人従業員のために設けられたスペースであったことが読み取れる。

ヴォーリズは生涯にわたって主に洋風建築を手がけたのだが、一部でありながら和風趣味の建築、もしくは和洋折衷の建築をも手がけたことが知られる。特に、「M. アーウィン邸（1931年、神戸）」は、ヴォーリズ作品のなかでも和風趣味の溢れる特異な作品として際立っている。¹⁹⁾ また、2代目の「八幡YMCA会館（1935年）」のように、2階に計画された和室のみならず、その外観においても和洋折衷が試みられた作品もある。さらに、ヴォーリズの著書「吾家の設計」の表紙にも採用された「伊藤邸（1922年、神戸）」など、洋風の外観でありながら必要に応じて部分的に和室を取り入れた例も少なくない。

これらの和室計画は、在日外国人のために明確な和風趣味を試みたアーウィン邸を除けば、いずれも和風趣味の発露というより、使用者である日本人の実生活に目線を合わせて作案したものと考えられる。1930年代の満州に現れた和室計画もこの延長線として捉えるべきであろう。

4. まとめ

以上、ヴォーリズが行った中国関連の設計活動について、現存す

る24件の図面史料の整理分析を通じ、そこから読み取れる特徴を中心に考察を行った。

まず、中国関連の現存図面からは、一部でありながら計画案の意図が窺える初期スケッチ図面が発見できたことや、東アジアを舞台とする欧米建築事務所の連携活動を裏付けるものとして他事務所が作図した青焼き図面が確認できたことは大きな収穫といえる。

また、各々の図面から明らかになった詳細な内容もさることながら、全体としてヴォーリズの中国における建築活動に見られる、二つの流れを捉えることができたことには意義があったと考えている。特に、1920年代の活動空白期を経て、1930年代に活動を再開した要因には、満州地域に進出した日系企業の存在が大きかったといえよう。さらに設計依頼者の全てが日本人となったことに伴い、作品名などに日本語表記の登場、そして和室計画の提案など、図面表記や設計内容にまで現れた変化を、現存図面から読みとることができた。

ただし、1930年代の設計活動が日系企業の関連施設が中心ではあったとはいえ、強い信仰心をもつクリスチャン企業の設計が主流であったことから、ミッションナリー建築家としてのヴォーリズの位置づけに変わりはないのであろう。むしろ、日本や韓国での初仕事と同様に、中国関連の設計活動が「Tokyo Chinese YMCA」から出発したことが意味すること、つまり学生YMCA運動を通じて伝道を目指したヴォーリズにとって、YMCA建築をはじめとするミッション建築こそが彼の建築活動の原点であったと改めて述べておきたい。

注

- 1) 鄭昶源・山形政昭：「東アジアにおけるヴォーリズ(W. M. Vories)の建築活動に関する研究—その1. 韓国(朝鮮半島)に計画された現存図面の整理・分析を中心に—」、日本建築学会論文集、2007年1月、p. 195～201
- 2) ヴォーリズ：「失敗者の自叙伝」、p. 203 (傍点は本稿の執筆者によるもの)
- 3) 山形政昭：「ウィリアム・メレル・ヴォーリズの建築をめぐる研究」、東京大学博士學位論文、1993年2月
- 4) 山形政昭：「東アジアに広がるヴォーリズの建築、東アジアの近代建築」、村松貞次郎先生退官記念会刊、1985年11月、p. 11～14
- 5) 前掲書(2)、p. 257～258
- 6) 出典—Jun King: 「in the Fire of Revolution - The American Social Gospel and the YMCA in China: 1919-1937」、Lehigh University Press、1996年
- 7) 韓国関連の現存図面においては、英語と日本語が併記された3件を除けば、全てが英語表記であり、日本語のみで表記されたものは皆無である。
- 8) 中国の都市名の表記においては、ヴォーリズの現存図面に戦前の旧名称が使われており、本稿においてもそれに従う表記とする。
- 9) G. M. Fisher: 「Formal Opening of the Chinese Students' Young Men's Christian Association Building」、1912年10月(日本YMCA同盟・真鍋泉氏からの提供)
- 10) 前掲書(2)、p. 256
- 11) ヴォーリズが目指した「神の国」は、一種のキリスト教的共同社会を意味するものと捉えられる。
- 12) ヴォーリズ：「A Visit to China」、Omi Mustard-Seed、1912年6月号、p. 43～50
- 13) 鄭昶源：「韓国ミッション建築の歴史的研究」、東京大学博士學位論文、2004年3月、p. 281～283
- 14) 前掲書(12)のOmi Mustard-Seed、①「A Hasty Tour Thru Korea, Manchuria, and North China」、1928年11～12月号、p. 89～108、②「A Brief Visit to Our Neighbors」、1930年4～6月号、p. 100～108、③「A Circle Tour in Korea, Manchuria and China」、1931年6～7月号、p. 25～27
- 15) ヴォーリズ：「Omi Sales Department」、Mustard-Seed、1931年4月号、p. 11
- 16) ヴォーリズ：「Omi Sales Dept.」、Mustard-Seed、1934年12月号、p. 106
- 17) ヴォーリズ：「Monthly Report」、Mustard-Seed、1937年2～3月号、p. 98
- 18) 石田榮造：「大信洋行三十年史」、非売品、1939年5月(傍点は最初から付けられていたもの)
- 19) 山形政昭：「ヴォーリズの住宅」、住まいの図書館出版局、1988年、p. 167～170

(2007年3月10日原稿受理、2007年5月7日採用決定)